

特別講演 1

「骨髄異形成症候群の臨床」

福井県立病院 副院長

羽場 利博 先生

骨髄異形成症候群（MDS）は後天的に造血幹細胞に異常がおこるクローナルな造血障害で、臨床的には1)無効造血による血球減少と、2)急性骨髄性白血病へ移行しやすい前白血病状態の2面を併せもつ疾患である。高齢者に多い特徴と、血球減少とそれに関連した臨床症状、末梢血および骨髄の血液形態的異常、骨髄染色体異常などに基づき診断されるが、加齢や腎機能低下などによる貧血などと診断に苦慮することもある。1982年のFABグループによるMDSの疾患概念と病型分類がなされて以来、広く知られるようになっており、本邦においても内山らにより、WDS診療のガイドラインが発表されている。MDSの病型診断は2001年のWHO分類(WHO分類2001)の提唱から、さらに2008年にWHO分類2008として改定された。一方、MDSの治療や予後の推定は1997年の国際予後スコアリングシステム(International prognostic scoring system,IPSS)が国際的に広く活用されている。また、こちらも2007年にWHO分類2001に基づいた新たな予後スコアリングシステム(WHO classification-based Prognostic Scoring System,WPSS)が報告されている。以上のような点について疾患の知識を整理できるようにお話したい。